る”ドミヤ降りの中で、今宮高校との練習試合の時だったが、あの時自分のシュートを用いて成功して勝った時のうれしさは、三年間のクラブ生活の最高頂だった。

苦しかった思い出

浅野　朝子

思い起こすとハンドボール、とか言う競技を初めて知ったのは、確か一年の終り頃だったと思います。同じクラスにハンドボール部に所属しているという人があり、いつも放課後になるとクラブの主たる人物と思われる女性が一、二人、練習に参加するようにとにらみをきかせにやってくる。するとその度に、彼女はいやな顔をしながらも承知していた。ある日何となく彼女にハンドボールってどんなことをするの？と聞きました。彼女曰くには、走り乍らボールを投げたり、受けたり。キーパーにとられないようにゴールに投げ込んだりするのよ。と教えてくれました。これが私にとって漠然とハンドボールについての知識を得た最初でした。（彼女すぐにやめたそうですが）そうこうしている内にウインタースポーツとして、クラス対抗の試合があり私もそれに引っぱり出されました。その時のコートは現在男子が行っているフィールド競技だったので、一年生の私達はたど度中で広いグランドを走りまわるだけでした。

試合後、男女クラブの多分二年生の幹部級の人達にクラブへの勧誘で、私達三人程さんざん追いかけまわされた末、いつの間にか入部してしまいました。二年生になるとすぐにバトンが渡され、新三年生は引退し、私達三人には必然的に部長等の役が定められ、初めはどうすることも出来なかったが、あわてて新入生の勧誘に必死になった。二、三人、ハンドボールというものが他のスポーツに比べて余り知られていなかったせいか、新入部員の勧誘が如何に困難であるか、その立場になって始めて勧誘する人達の苦労がわかり、ふと自分達の頃を思い出し苦笑せずにはいられませんでした。こういう気持は卒業された誰しもの心に共通して思い出される事でありましょう。

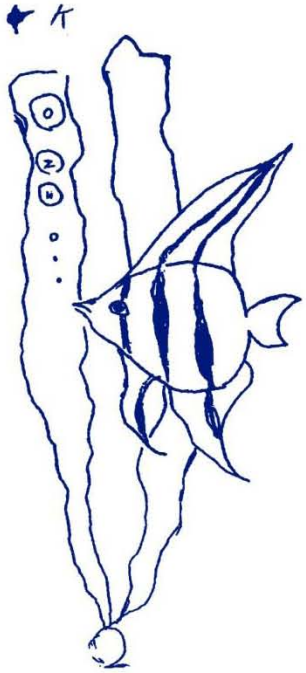
兎にかく私達の時代には一チームにも満たない状態だったので、技術上達そのものより、クラブ自体を持続していくだけで精一杯でした。なにしろ二、三人の練習が、しばしばですから華々しい対外試合等というものは、いくら思い出して綴ろうとしても涙かんでさまません。時には雨の中、全く

の"どろんこゲーム"もありました。たゞ夢中で、その時の姿といったら今思い出しても恥ずかしく、赤面する思いです。でも試合の時は自分自身それなりに一生懸命やったつもりです。

ちょうど私達が活躍している頃からルール面で、女子の場合は広いフィールドを使用せず、室内と同じ大きさのコートに一定し、ジャンプシュートが新しく試み始められました。さっそく練習したものゝ私達のまづいホーメーションでは得点に結びつかず、先輩の方々をやきもきさせたものでした。

これといって何も功績のなかった三、四年前のクラブを通じての自分を思い出しつゝペンを走らせていると、余りにも早く経ってしまった歳月、そして勝利の本当の喜びを充分に味わえなかったという腹立たしさで、何か胸にせまるものを感じられずにはおれません。

日本ポーツは参加する事であり勝つ事ではないと言われていますが、参加するからには良いチームワークで勝利の方向へもって行くことによってお互の心にフアイトがわき、喜びをわかち合えるのではないでしょうか。でも在学中のほんの少しのクラブ活動でしたが、ハンドボールを通じて、自分自身の中に如何なる人とも、チームワークを築く自信がつき多少なりともスポーツ精神といわれるべきものと、あるいは、厳しさの中に人の心のあたゝかさというものを身につけ、新たな学生生活の中で誇りを持って、あらゆる人々に接する事が出来、そして今では先輩として、時々母校を訪れ後輩の活躍ぶりを傍観した時には一緒になって練習出来る事を喜んでいます。

今後とも、現役・OB・父々に親睦を計り発展することを期待してやみません。

―終り―